ICU過去問(国際基督教大学入試過去問)
2023年度　人文･社会科学
＊ICUに入学を希望する受験生の学習のために公開している資料です。
(This is NOT the official Exam.)

受験番号					

人文・社会科学

問　題　冊　子

指　　示

合図があるまでは絶対に中を開けないこと

1．この試験は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができるかを調べるためのものです。
2．この冊子は前半が資料で、後半に**40**の問題（**1−40**）があります。配点は **80 点**満点です。解答カードには表裏あわせて 50 の解答欄がありますが、**41**以降は使用しないで下さい。
3．解答のための時間は、正味 **80 分**です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて 80 分をどう使うかは自由です。
4．解答のしかたは、問題の前に指示してあります。答えの記入のしかたが指示どおりでないと、正解でも無効になります。
5．**答え**はすべて、**解答カード**の定められた枠の中に**鉛筆**を用いてマークして下さい。
それ以外のところに書いたり、また答え以外のものを書きこんだりすると無効になります。
6．一度書いた答えを訂正するには、消しゴムで**きれいに消してから**、あらためて正しい答えを定められたとおりに、はっきりマークして下さい。
7．メモには**この問題冊子の余白**を用い、ほかの紙は使用しないで下さい。
8．「解答やめ」の合図があったら、ただちにやめて下さい。試験監督が問題冊子と解答カードを集め終わるまでは、退室できません。
9．この指示について質問があるときは、試験監督に聞いて下さい。

「受験番号」を解答カードの定められたところに忘れずに書き入れること

（余　白）

序章　はじめに

カナダ生まれの人文学者マーシャル・マクルーハンは、1962年の著作『グーテンベルクの銀河系　活字人間の形成（*The Gutenberg Galaxy: The Making of Typographic Man*）』で私たちの世界をこう表現した。

> *電磁気に関する諸発見が、すべての人間活動に同時的「場」を再創造し、そのために人間家族はいまやひとつの「地球村」とでもいうべき状態のもとに存在していることは確かなのだ。*（森訳を一部改変）

> *電子技術による新しい相互依存は、世界を地球村のイメージで創りかえる。*（森訳）

それから半世紀以上経った今日、私たちはこの地球村（global village）ということばにさほど違和感を感じることはないだろう。テレビやスマートフォンといった電子メディアがコミュニケーション・ツールとして当たり前のように存在し、必需品となった社会。電子メディアが地球を網の目のように包み込み、情報が瞬時に世界を駆け巡る世界。電子メディアを通じ、地球の裏側の出来事があたかも自分の住んでいる村に起こった事のようにリアルタイムで触れることができる日常。実際、私たちの多くが彼の描いたイメージをなんら躊躇することなく受け入れているのではないだろうか。

今や研究者のアカデミックな言説のみならず、メディアやITビジネスに携わる業界人、その他市井の人々の語りにもしばしば登場するマクルーハンの地球村。この現象は、インターネットが一般に普及し始めた前世紀末から今世紀初頭頃にかけて特に顕著になったようだ。高度に発達したコンピュータ技術が普及し、世界各地の人びとが、デジタルメディアのネットワークでいつでもどこでもつながることができるような感覚を持つようになり、マクルーハンが60年前に語っていた地球村の概念を人びとがふと「思い出した」ということなのだろう。米国のメディア研究者マーク・ポスターは「インターネット上のグローバルな関係はすなわちローカルな近所付き合いであり、それはマクルーハンの精神に非常に近い」と2001年の著作に記している。オランダ・マーストリヒトのマクルーハン研究所所長（当時）キム・フェルトマンも、2008年の論考でマクルーハンの地球村を私たちのグローバルかつユビキタスなつながりを可能としたインターネットと重ね合わせている。

本稿では、マクルーハンの地球村の着想とメディア技術の展開を考察しつつ、私たちはどう電子メディアと付き合っていくべきなのか、そして社会はこれからどうなっていくのかを考えたい。

1章　グーテンベルクからマルコーニへ

19 世紀末、ドイツの科学者ハインリヒ・ヘルツは、電磁波が長距離を伝わるために必ずしも物理的な配線を要しないことを発見した。ある一定の波長の電磁気、すなわち「電波」により、遠隔に設置されているが故に切り離されているはずの 2 つのアンテナ間がつながることを実証したのだ。このヘルツの実験を実用化したのがイタリアの発明家グリエルモ・マルコーニである。当時、既にモールス符号を用いた電信は実用化されていたものの、それは電柱などを用いた物理的な配線による有線接続であった。マルコーニはヘルツの実験から着想を得、無線電信の様々な実験を試み、会社を設立し事業を拡大、ついには 1901 年、大西洋間（具体的にはイギリスのポルデューとカナダのニューファンドランド島間）を無線電信でつなげることに成功した。ちなみに 1912 年のタイタニック号事故の際に発せられた遭難信号「SOS」も無線電信によるものである。

程なくして無線電信の技術を元に無線電話が開発され、さらに電波に乗せて中空に発せられるコンテンツには、特定の者に宛てられた通信のみならず不特定の聴取者を対象とするものも出現した。ラジオ放送の誕生である。そして 1950 年代中盤、その放送コンテンツに画像・動画が加わり、遠隔（tele）と視覚（vision）という二つの語を組み合わせたテレビジョン（tele-vision）が登場した。

マクルーハンによれば、地球（の）村（化）は、それまで幅を利かせていた「グーテンベルクの銀河系」つまり 15世紀にヨハネス・グーテンベルクが発明した、活版印刷を主要な媒体とする文字文化の 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての衰退と時を同じくして開始した。彼はこう記している。

> *グーテンベルクの銀河系は理論的には 1905 年に行われた曲がった空間の発見とともに解体した。だが現実にはそれより二世代前の電信の発明によって切り崩され始めていた。*
> （森訳）

彼がここで言及する「1905 年の曲がった空間の発見」がアルバート・アインシュタインによって物理学にもたらされた「革命」の一環であることは言うまでもない。「時空間の歪み」といった発見は直線的なニュートン力学に毒された人びとの世界観に大幅な変更を強いる事柄であったに違いなかっただろうし、またその中で地球の裏側をほんの近所と思えるような状況といったことがよりリアリティを持ち得るのも確かだろう。だがマクルーハンは、アインシュタインの発見よりも以前に、サミュエル・モールスらの有線電信を基に、ヘルツの実験を応用しマルコーニが実用化した無線電信をその先駆けとする、電波メディアを用いたコミュニケー

ションこそが、地球村の幕開けのきっかけであったと指摘するのである。

ここで電子メディアの中でも、特にラジオについて少し論じたい。ラジオ放送が本格化したのは、受信機がそれまでのコヒーラ検波式から鉱石式、さらには真空管式に置き換えられるようになった1910年代以降であると言われている。1920年には米国ペンシルベニア州ピッツバーグに世界最初の商業ラジオ局（KDKA）が開局し、その3年後の1923年、日本においてもラジオ放送実験が行われ、さらにその2年後東京放送局（現在の日本放送協会（NHK））の本放送が開始された。

マクルーハンが地球村を論じた1960年代前半、ラジオは電波メディアの主役の座を既にテレビに譲っていたと言える。しかしながら、電子技術により世界があたかも一つの村のように感じられるといった地球村のイメージは、ラジオにこそふさわしいとも言える。その大きな理由が、ラジオ放送に用いられてきた電波の周波数帯そしてその伝播特性である。

現在、テレビ放送（衛星やケーブル放送は除く）で用いられる「超短波」帯や「極超短波」帯の電波は、直進性が高く、距離による減衰が激しい。東京都内のテレビ塔から発せられる地上波テレビの視聴可能地域が関東圏に限られるのはそれが理由である。端的に言えば、稀にある異常伝播の場合を除き、遠くに届かないのだ。一方、マルコーニの時代以来ラジオに長く用いられてきた「短波」帯の電波は、大気中を直進するのみならず、高度数百キロメートルに位置する電離層反射を利用することで長距離伝播も可能となる。例えば、現在、短波を用いている日本のラジオ放送は極少数であるが、そのうち唯一の民間放送「ラジオ NIKKEI」は、千葉県長柄の送信所から発せられる電波のみで日本全土をカバーし、また先に挙げた米国ピッツバーグのラジオ放送は、大西洋を越えた英国でも短波帯において比較的良好に受信できていたとの記録が残っている。

さらに、私たちにとってより馴染みが深いと思われるAMラジオ放送で現在用いられている「中波」帯の電波も、電離層状況によっては、遠距離伝播が可能だ。例えば、冬の夜長、電離層を反射した福岡のAM放送の電波を大阪で受信し番組を楽しむことができることは、多くのラジオ愛好家が知るところだ。さらには、中波帯で放送を行う秋田県のAMラジオ局には、中国、フィンランド、スウェーデン等海外在住のラジオ愛好家からの受信報告書が近年増加しているとのことである。ラジオにとって「ボーダー」はほぼ意味をなさない。県境や国境などあってないようなものだ。さらにその働きは物理的距離をも超越する。グーテンベルクの銀河系に代わってマルコーニの銀河系を打ち立てた、地球村の代表格たる電子メディア、それがラジオなのだ。

ただし皮肉なことに、歴史上、ラジオのボーダーレスな電子メディアとしての働きが最もあらわになるのは、「分断状態」の世界である。例えば、第二次世界大戦中ロンドンに置かれた「亡命」オランダ政府が最初に着手したことの一つに、海を隔てたナチス・ドイツ占領下のオ

ランダ向けのラジオ放送があった。かくして、「英国放送協会（BBC）」の電波を借りた亡命政府の「ラジオ・オラニエ」は、ナチスの検閲に対抗するオルタナティブな報道、さらには占領下のレジスタンスの声を代弁した。同時期、日本の「ラジオ東京」は太平洋戦線の連合国軍に向け、事実と異なる報道を含むニュース番組、連合軍の捕虜を「役者」として用い日本の立場の正当性をアピールするラジオドラマ等の番組を英語で放送した。中でも、連合軍兵士の戦意喪失を目的とした若い女性のディスクジョッキー、通称「東京ローズ」が甘い声で囁く娯楽番組は多くの連合軍兵士の間で人気が高かったとのことだ。

ちなみに太平洋戦争末期、米国は「米国の声（VOA）」による日本向け番組を行っていた。サイパン島から送信されるその電波は日本で聴取可能であったとの報告もある。ただし当時、外国放送の「聴取禁止令」が発令され、かつ妨害電波（ジャミング）がかけられていたこともあり、国内において広く聴かれるには至らなかったようである。

第二次世界大戦後も、地球はラジオ放送の電波により騒がしい状態が長く続いた。特に東西冷戦は「電波戦争」と言われるほど、鉄のカーテンを越えさまざま電波がとびかう状態であった。BBC や VOA といった西側諸国の放送局もさることながら、それ以上にアクティブであったのが東側陣営のラジオ放送である。その筆頭たるソビエト連邦の「モスクワ放送」は、広大な国土に大出力の送信所をいくつも設置し、1980 年代初頭の時点で、64 種の言語を用いた番組を毎日 500 波以上の周波数を用いて放送していた。さらにはベトナム戦争、中東戦争、イラン・イラク戦争、ユーゴスラビア戦争等においても、ラジオは電波戦争の道具また国境を越える情報共有・相互理解の道具として重要な役割を果たした。

短波帯・中波帯の電波が持つボーダーレスな伝播特性そしてその有効性は、今も健在だ。これらの電波を用いたラジオ放送は、物理的距離を問わず、富める者にとっても貧しい者にとっても同様に受信可能である。確かに、音声の再現性や音質については、CD や有線回線を用いたメディアには敵わない。また、同じ周波数、あるいは隣接周波数を用いた放送による「混信」の問題もある。しかし、ラジオは非常に手軽なメディアだ。インターネットによるコミュニケーションは、システムが適切な接続を失うと不可能となり、その意味において非常に脆弱なのは私たちの知るところだ。しかしラジオは無線であり、物理的な接続を前提としない。送信機と受信機、そして一対のオープンワイヤー（アンテナ）を必要とするだけだ。大規模災害により回線が不通となり、スマートフォンやパソコンが無用の長物となる時にこそ、ラジオはコミュニケーションメディアとして真価を発揮する。BBC の視聴者調査部門元責任者グラハム・ミトンが述べるように、抑圧的な国家体制がインターネット・サイトをブロックし、テレビ番組を妨害しても、ラジオは決して怯まない。2022 年のロシア軍によるウクライナ侵攻の際、破壊された重要施設の一つがテレビ局を含むメディアインフラ関連であったが、それに対する国際社会の迅速な対応として、各国の放送局によるウクライナ向けラジオ放送の増強や復

活があったことは記憶に新しい。

2章　部族的太鼓とアレクサンドリア図書館

マクルーハンは、16世紀フランスで活躍した人文学者ピエール・ド・ラ・ラメと米国プラグマティズムの大家ジョン・デューイが、グーテンベルクそしてマルコーニの銀河系という対立する文化の波をそれぞれ巧みに乗りこなしたことを称賛する。もちろんマクルーハン自身も、グーテンベルクの銀河系からマルコーニの銀河系への移行という、潮目の大きな変化にも流されることがなかったなかなかの波乗り巧者であったことは想像に難くない。ただし電子メディアが構築する地球村の未来について、マクルーハンは思いのほか冷静だ。それどころか、世界のさらなる地球村化に対し彼はこう警鐘を鳴らす。

> *巨大なアレクサンドリア図書館の建設にむかうかわりに、世界それ自体が、まさに初期の頃の SF 本に描かれていたのとそっくりに、一台のコンピュータ、一体の電子頭脳となったのである。そしてわれわれの感覚が外にむかったように、ビッグ・ブラザーはわれわれの内へとむかう。そしてわれわれがかりにこの新時代の力学に気付かないときには、われわれは部族的太鼓の鳴りひびく小宇宙に似つかわしい世界、制することのできない恐怖の時代へと直ちに移行することになろう。それはまた全面的な相互依存の時代、上から押しつけられた共存の時代でもある。*（森訳を一部改変）

マクルーハンが言及する「ビッグ・ブラザー」とは、言うまでもなく英国の作家ジョージ・オーウェルの小説『1984年』に登場する全体主義社会の指導者である。そのビッグ・ブラザーが「内へとむかう」という。もう一点注目すべきは、英語で書かれた原典では computer（コンピュータ）および electric brain（電子頭脳）という二つの名詞の前に置かれている「a」そして「an」という不定冠詞だ。つまり、電子メディアにより地球が「一台の」コンピュータ・「一体の」電子頭脳と化してしまうとマクルーハンは述べるのだ。実は、この行の直前にマクルーハンは生物学者ピエール・テイヤール・ド・シャルダンの

> *われわれのさまざまな感覚を電気で薄くひきのばし地球をすっぽり覆う、宇宙皮膜*（森訳）

という概念を引用している。このシャルダンの宇宙皮膜と地球村がいずれも「単数形」であることは、彼が地球村を語った『グーテンベルクの銀河系』発刊の2年後に著した『メディア論

人間拡張の諸相（*Understanding Media: The Extensions of Man*）』で本格的に展開した「メディアは人間の拡張」論とも合致する。すなわち、あらゆるメディアは人間の持つ感覚の体外への延長であり、元を辿ればすべて「中枢神経系」に行き着くという「シングルオリジン」論と、地球をすっぽり覆う一枚の皮膜・一台のコンピュータと化する地球といった考え方は基本的なところでつながっているのだ。

マクルーハンが憂慮するのは、私たちの営みが電子メディアによって極めて高度に中央集権化された、全体主義社会の最終形としての地球村の未来である。それは、先にラジオの考察において見た、様々な声が電波に乗せられ地球のあちらこちらに伝播し、時に交錯し、時に反目し合うといった、騒がしい地球村といったイメージとは少々様子が異なる。無論、決して何も聴こえないという訳ではない。唯一存在するのは「部族的太鼓」だ。この部族的太鼓とは、グーテンベルクの銀河系以前の世界の私たちの相互依存、すなわち文字を用いた視覚ではなく口承・音声での伝達が主たるコミュニケーション手段であることを示すメタファーである。ただしその太鼓が発するのは、ビッグ・ブラザーが奏で、それが世界同時に同じ響きで伝わり、そして私たちすべてが同じ感覚を持ち、同じ反応をすることを強いられる音だ。そこには意味の多様性や複数の解釈可能性の余地はない。一台のコンピュータと化した地球村では、すべてが共有され、共同化される。私はあなたであり、あなたは私であり、上から押しつけられているが故、私たちの共存は完璧に調和が取れているのだ。

こういった地球村のディストピア的イメージと対比されているのが「アレクサンドリア図書館」である。ヘレニズム時代、古代エジプトのアレクサンドリアに設置され学問の中心となったアレクサンドリア図書館だが、マクルーハンの意図は歴史上の存在としての古代図書館自体を論じることにあるのではなく、あくまでもそれを文字文化のメタファーあるいは象徴として用いていると捉えるべきだろう。すなわち、ここで彼が提示するのは「中央集権的志向・全体主義的傾向が見え隠れする地球村」対「個人主義や権力分散をモットーとするグーテンベルクの銀河系」という構図だ。マクルーハンはこう記している。

> *活版印刷は言語を認識と探求の手段から、ポータブル商品へと変える傾向を示した。*（森訳）

> *本が持ち運びできるようになったことは、持ち運び可能になった画架と同様、新しい個人主義崇拝を大幅に助長することとなった。*（森訳を一部改変）

活版印刷の発明以前、製本の主流が「写本」つまり原本を手書きでコピーするやり方であった時代が長く続いた。例えば、聖書や聖典の写本は聖職者の重要な修行の一部でもあったのだ。

それを考えると、グーテンベルクによる活版印刷の実用化はまさに大事件であったことだろう。まず作業効率が格段に上がったことにより、より多くの部数が製本され、より多くの人々が自分の本を持つことが可能となった。これは一種の文化の個人所有の促進と考えても良いだろう。さらに活版印刷は「読書」活動の変化をもたらした。具体的には、一編の原本を（自身のためのみならず他者のために）「朗読」するといった共同作業から、個人的な空間や時間を使い、印刷された文字を自分のペースで目で追うという個人作業すなわち「黙読」への移行を促したのである。

ちなみに、グーテンベルクの発明より十数世紀前に存在した実際のアレクサンドリア図書館は、当時、黙読が確立されていなかったこともあって、皆がそれぞれ思いのままに書物（多くの場合巻物）を音読する、かなり騒々しい空間であったという。

16 世紀キリスト教世界で起こった「宗教改革」は、活版印刷の権力分散的な側面を示す最もわかりやすい事例の一つだろう。当時、教皇を頂点とする中央集権的なカトリック教会に対し、組織改革を唱えたのがプロテスタントと後に呼ばれるようになる聖職者であった。その代表格の一人がドイツのマルティン・ルターだろう。1517 年、ルターはカトリックの免罪符販売を批判した「95 ヵ条の論題」をラテン語で著し、それはドイツ語でも発表された。活版印刷はそうしたルターの一連の改革作業の後押しをした。それまでもっぱらラテン語の説教のみが福音へのアクセスであったドイツ語話者にとって、自分の言葉で書かれた聖書を所有し、読み、そして考えることができるようになったことは大事だったであろう。そしてそれがプロテスタントの教えに力を与え、教皇を中心としたカトリック教会の絶対的権威の弱体化に拍車をかけただろうことは想像に難くない。

ただし、マクルーハンが提示したものと逆の構図、すなわちインターネットこそ巨大なアレクサンドリア図書館であり、かつ個人主義・権力分散的メディアと捉える向きも私たちの中にはかなりあるだろう。本稿の冒頭で、私たちによるマクルーハンの地球村再発見の背景に、インターネットの普及があるとの見解を紹介した。確かに、インターネットのウェブ・ブラウジングひとつ取ってみても、私たちのコミュニケーションは高度に個人主義化しているように思える。ユーザーのカスタマイズにより、ポータルサイトでは読みたい記事のみ読み、見たい動画のみ視聴することができる。検索エンジンを利用し、ありとあらゆる情報の中から自分が必要とする情報のみを選択することができ、しかもその情報を瞬時に入手することまで可能なのだ。

しかしその一方で、インターネットは本当に個人主義崇拝のメディアと言うことができるのだろうか。例えば、ショッピングサイトで購入した品物は、その全てが自らの意思で選んだものだろうか。サイトの「おすすめ」に促されたものもあるのではないか。ソーシャルメディアへの書き込みは、純粋な個人的意見の表明であると果たして言えるのだろうか。「インフルエ

ンサー」に感化されたものが全くないと言い切れるか。「エコーチェンバー」の如く反響する、似たような内容の書き込みの海で「みんなの意見」がいつのまにか「自分の意見」にすり替わっていないか。今、「いいね」をクリックしたのは自分の本心からか。電子メディアによってつながれ、一つとなった私たちの内に向かうビッグ・ブラザー的なものの存在の影響を完全否定できる自信は私たちにあるだろうか。

3章　宇宙皮膜を突き破れ

電子メディアによる私たちのつながりが創る地球村。そこではすべての活動の同時的場での発生が可能となり、新たな相互依存が促進され、地球の裏側の出来事が目の前でリアルタイムに起こり、地球の裏側の人々と同じ感覚・感情が瞬時に共有される。その最終形態が一枚の皮膜ですっぽり覆われた地球であり、また一台のコンピュータと化した世界である。それ故、地球村とインターネット上のいわゆるサイバースペースとを重ね合わせる、あるいは両者をほぼ同質なものとして論じることに私たちはあまり違和感を持たないのだ。

ここでインターネットと、その発見が地球村の幕開けとなったとマクルーハンが述べた電子メディアの代表格たるラジオとを比較してみたい。ラジオとインターネットの決定的な違いは、コミュニケーションにおけるつながりの確実性であり、それに対する私たちの期待度だろう。まず、ネットワーク上のIPアドレスが互いに確実に接続されていること、つまりコミュニケーター間の相互接続の確立がインターネットにおけるコミュニケーションの前提である。端末を持っていたとしても、ネットワークにつながっていない者はサイバースペースに参加することはできないし、不安定な接続はコミュニケーションの断絶を生じさせる。それ故、私たちがインターネット上のコミュニケーションに参加する際は、確固たるつながりが常時、例外なく保証されていることを期待する。それは動画配信であれ、ウェブ・ブラウジングであれ、あるいは電子メールであれ、はたまたそのネットワークが一部「wi–fi接続」であっても同様だ。

対してラジオは、コミュニケーターたる送信者・受信者間に物理的なつながりがそもそもないところから話が始まる。さらに、いとも簡単に国境そして海峡を越える一方、大気を伝わり、また電離層を反射する短波・中波の伝播は必ずしも安定しているとは言えず、常時同じ状態でつながることができるとは限らない。実際、送信はされているものの、伝播状況により微弱な電波しか届かず放送聴取が不能な場合もあるだろう。ただし多少の苛立ちを見せつつも、大方のラジオリスナーはそういった電波メディアの特性を十分承知している。少なくとも、相手からの既読通知や返信を求める等、インターネットに対するものと同様のコミュニケーションの確実性を求めることはない。例えば、秋田のラジオ放送の番組を同じ状態で365日24時間楽しむことができるわけではないことを、北欧のラジオ愛好家は十分わかっている。だからこそ、

綺麗に受信できた時の喜びはひとしおなのだ。相互接続を前提とするインターネットでは、ネットワークのキャパシティを超えた接続の集中はコミュニケーション不全を引き起こす。ラジオの場合、ある放送局の電波の受信を一度に何人が試みてもそのようなことは起きない。また、雑音や混信によるコミュニケーション障害もいわば「想定内」であり、インターネット回線の安定性が失われた時のような「不安」は生じさせない。

つながりを前提条件とするのがインターネットをモチーフとした地球村のイメージなら、つながりがないからこそそれを求めていこうとするのがラジオをモチーフとした地球村のイメージだ。実際のところ、宇宙皮膜はSF小説の世界に留まっており、ディストピア的な地球村も未完成である。であれば、私たちは前者の今後の展開に注意を払いつつ、後者のさらなる可能性を考えていくべきではないだろうか。電子メディアが構築する確固たるつながりにより、地球を一体の電子頭脳とすべくエネルギーを費やすよりも、つながっていない個々が電子メディアを駆使し、不安定ながらもつながっていくことを是とする社会を作るべきではないだろうか。

米国のコミュニケーション研究者であるジョン・ダーラム・ピーターズは、コミュニケーションに不可欠なものの一つに、私たちの間の「gap（ギャップ、隙間、隔たり）」があると述べる。すなわち、相手との間にギャップがあるからこそ、それを埋めるべく私たちはコミュニケーションを試みるというのだ。遠く離れているからこそ、連絡を取りたい。もう何年も会っていないからこそ、会って言葉を交わしてみたい。自分とは全く異なる体験をしてきた人だからこそ、話を聞いてみたい。オンライン授業はもう飽き飽き、教室で直接友達と会って話をしたい。コミュニケーションの動機づけの一つとしてのそういったギャップを感じる機会は、日々少なからずあるだろう。

無論、そうしたとて確実にギャップが埋まる保証はない。無駄骨に終わる可能性も十分にある。それでもここで私たちは先人を見習うべきではないだろうか。例えば、もしヘルツが、物理的に配線がなされていない二つの点は、どう考えてもつながりっこないなどと考えていたのであれば、当然、電波の発見などなかった。もしマルコーニが、大西洋間の無線通信など無理筋だなどと諦めていたのなら、地球村の今はなかったはずだ。

コミュニケーションは思い通りにならないのが世の常だ。私たちの何気ない一言が、思わぬ形で仲違い、分断、共感、そして連帯を生む。つながりたいあの人とはつながることはできなかった。しかし想定外のこの人とつながった。それが地球村の日常だ。届くかもしれないし、届かないかもしれない、誰に届くかも定かではないし、またいつ返事があるかも知り得ないラジオ放送の電波のごとしだ。そしてそこにあるのは、相互接続が確立されたネットワークやコンピュータ内部の理路整然とした回路上の確実なつながりではなく、つながっていないからこそつながりたいという私たちの情熱そして希望ではないだろうか。

そしてそのような情熱・希望は、太平洋の向こう岸や地球の裏側どころか、宇宙皮膜を突き

抜け、銀河の彼方に思いを馳せる。1970年代初頭、米国航空宇宙局（NASA）が土星・木星観測のため打ち上げた外惑星探査機パイオニア10号および11号は、その観測ミッション終了後、当てのない宇宙の旅に出た。太陽系を飛び出し、地球外知的生命体とのつながりを築くべく、機体には地球の位置や人類の図解が描かれた金属板が搭載されている。ただし、実際、そういった生命体が存在するかどうかは定かではない。たとえ存在していたとしても金属板に描かれた図解を理解できるかどうかもわからない。また、その生命体と地球との間に何万光年もの距離があるのであれば、どこかの星に行き着いた時点で人類がどのような状況となっているのかも不明だ。死滅している可能性さえある。それどころか、機体には地球に帰還するためのエンジンや燃料さえ搭載されていないのだ。情熱・希望と言えば聞こえはいいが、果たしてこのつながろうとする試みに意義はあるのだろうか。結局、未だに何も得られていないではないか。

旧約聖書「伝道の書」のコヘレトはこのような言葉を遺している。「朝のうちに種をまけ、夕まで手を休めてはならない。実るのは、これであるか、あれであるか、あなたは知らないからである。」（11：6、日本聖書協会訳）

終章　おわりに

ここまで、マクルーハンの地球村という着想をモチーフに、私たちのメディアとの付き合い方、そして私たちの社会のあるべき姿を考えてきた。マクルーハンがこのことばを世に送り出してから約60年が経過した。地球村が果たしてインターネットの予見であったのか否かはさておき、彼の提起した問題は私たちにとって未だにリアルであり、またこれからもそうあり続けることだろう。

本稿の冒頭で、地球村はさまざまな人びとの語りの中に登場する概念であることを指摘した。「「地球村」は、マクルーハンの口から発せられた瞬間から一人歩き」し、「受け手のひとりひとりが「地球村」から自分なりの「メッセージ」を創出してきた」と宮澤淳一は述べる。確かにそういう部分はあるかもしれない。そして彼の描いた地球村に触発され創出された様々なメディア論を、もしマクルーハン本人が読んだとしたらどう思っただろう。「これは私を誤解している！」「これこそ私の言いたかったことだ！」「私はこんなことを書いていたのか？」等々、様々なリアクションが思い浮かぶ。

ドイツの文豪ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe）は、明治時代、「ギョエテ」「ギョーツ」「グーテ」等様々な名前で紹介されていた。それ故、詠み人知らずの「ギョエテとは俺のことかとゲーテ言い」という川柳が残されているほどだ。ちなみにマクルーハンのフル・ネームはHerbert Marshall McLuhanであるが、ファミリー・ネームであるMcLuhanの5レター目の「h」は「無声音」だ。発音をカタカナで表記すると「マクルーエン」あるいは「マクルー

アン」に近い。死後約40年経ち、地上に舞い戻ったHerbert Marshall McLuhanが、もし、アジアの島国のとある大学の入試問題に自分のメディア論が登場したことを発見したなら、どう反応するだろうか。論理学・文法・レトリックからなるリベラルアーツ三学で博士号を取得しアカデミック・キャリアをスタートした、言語芸術に造詣の深い彼のことだ。字余りではあるが、こんなトンチの効いた句を詠むかもしれない。「マクルーハンは俺のことかとMcLuhan言い。」

主要な参考文献

Doreen Carvajal (2004, May 11). "Shortwave-Radio Era Looks Short-Lived." *International Herald Tribune* (reprinted in *New York Times*. Online Ed.).

Jerome S. Berg (2013). *The Early Shortwave Stations: A Broadcasting History Through 1945*. McFarland & Company.

Norbert Bolz (1993). *Am Ende der Gutenberg-Galaxis: Die neuen Kommunikationsverhältnisse*. Wilhelm Fink.(和訳『グーテンベルク銀河系の終焉　新しいコミュニケーションのすがた』識名章喜・足立典子訳、法政大学出版局)

Gabriele Falciasecca, Elena Lamberti & Barbara Valotti (2011). *Marconi Galaxy: Probing the World the Wireless Made and Makes*. University of Toronto Press.

Bruce Gronbeck (1981). "McLuhan as Rhetorical Theorist." *Journal of Communication* 31. 117-128.

Paul Levinson (1999). *Digital McLuhan: A Guide to the Information Millennium*. Routledge.（和訳『デジタル・マクルーハン情報の千年紀へ』服部桂訳、NTT出版）

Alberto Manguel (1996). *A History of Reading*. Penguin Books（和訳『読書の歴史あるいは読者の歴史』原田範行訳、柏書房）

Marshall McLuhan (1962). *The Gutenberg Galaxy: The Making of Typographic Man*. University of Toronto Press.（和訳『グーテンベルクの銀河系活字人間の形成』森常治訳、みすず書房）

Marshall McLuhan (1964). *Understanding Media: The Extension of Man*. McGraw-Hill.（和訳『メディア論⊠人間の拡張の諸相』栗原裕・河本仲聖訳、みすず書房）

John Durham Peters (1999). *Speaking into the Air: A History of the Idea of Communication*. University of Chicago Press.

Mark Poster (2001). *What's the Matter with the Internet?* University of Minnesota Press.

Lawrence C. Soley & John S. Nichols (1986). *Clandestine Radio Broadcasting: A Study of Revolutionary and Counterrevolutionary Electronic Communication*. Praeger.

Kim Veltman (2008, January 15). "Global Villages, Portable Internet, and Two-Way Communication: Revolutions McLuhan Could not Foresee." From, http://blog.p2pfoundation.net/what-mcluhan-could-not-foresee/2008/01/15

池田徳眞（1979）『日の丸アワー　対米謀略放送物語』中央公論社。

小友聡（2020）『それでも生きる旧約聖書「コヘレトの言葉」』NHK出版。

門林岳史（2009）『ホワッチャドゥーイン、マーシャル・マクルーハン？感性論的メディア論』NTT出版。『聖書』（1987）日本聖書協会。

宮澤淳一（2008）『マクルーハンの光景メディア論がみえる』みすず書房。

日本BCL連盟（1983）『DX年鑑1983』日本BCL連盟。

次の問題（１－４０）には、それぞれａ，ｂ，ｃ，ｄの答えが与えてあります。
各問題につき、ａ，ｂ，ｃ，ｄのなかから、最も適当と思う答えを１つだけ選び、
解答カードの相当欄をマークして、あなたの答えを示して下さい。

例　(41)　〔ａ〕　〔ｂ〕　●　〔ｄ〕

次の問いに最もふさわしいと思われる回答をマークしなさい。

１．　「地球村」という表現は、世界全体を示す「地球」という語に空間的に限られた場所を意味する「村」を組み合わせ、これまでにない概念を表している。これは一見矛盾した言葉を連結することで一般常識とは異なる意味を示す修辞法である。同様の修辞法が使われた表現を次のうちより選びなさい。

ａ．暖簾に腕押し
ｂ．後悔先に立たず
ｃ．急がば回れ
ｄ．頭隠して尻隠さず

２．　資料にある「ユビキタス」の意味を次のうちより選びなさい。

ａ．仮想空間にあること
ｂ．いつ、どこにでも存在すること
ｃ．平等・公平であること
ｄ．円滑に物事が進むこと

3．　筆者は「電子メディアとの付き合い方」について論じているが、その主張の要約としてもっとも適切と思われるものを次のうちより選びなさい。

a．インターネットはユーザーが必要な情報だけを選ぶことができ、個人主義を進めてくれるので、積極的に活用すべきである。

b．無線通信は遮断が難しく、敵対する国どうしが情報合戦に利用することから、平和的ではない危険なツールとして扱うべきである。

c．コンピュータを使って通信すると、匿名によるコミュニケーションの故、他者の人権を侵害してしまいかねないので使用を控えるべきである。

d．無線で発する メッセージはどこの誰に届くかわからないところから、大きな可能性を秘めたものとして再考すべきである。

4．　モーリス・ルブランの『怪盗紳士ルパン』（1907）には、当時最新技術であった海上無線電信が登場する。

ところが、二日目の荒れ模様の午後、フランスの沿岸から500マイルほど離れたところで、無線が次のような緊急の知らせを告げてきた。

『一等船室にアルセーヌ・ルパン。金髪、右の上腕に疵あり、同行者無し、偽名はR…』

ちょうどその時、暗い空に激しい雷鳴がとどろいた。電波は中断され、伝聞の残りは届かなかった。アルセーヌ・ルパンの偽名は頭文字しか分からない。

（モーリス・ルブラン『フランス語で読むアルセーヌ・ルパン』佐藤若菜訳、NHK出版、2013年）

新たに可能となった陸地と海上の船との交信が、船上という密室で張り巡らされるルパン包囲網の一端を担っている。このように海上無線電信を含む無線通信の実用化は人々のコミュニケーションに対する意識を大きく変えたと言えるだろう。有線通信と無線通信を比較した次の文章の（X）と（Y）に入る言葉として正しい組み合わせを次のうちより選びなさい。

「無線通信は有線通信に比べて（X）が、（Y）という特徴がある。」

a．X：接続が不安定である　　Y：受信者が複数であることを拒まない
b．X：物理的配線を必要としない　Y：移動する相手とは通信ができない
c．X：接続が安定している　　Y：送信する情報量はより少ない
d．X：接続が天候に左右される　　Y：一対一の限定的な通信である

5．　資料にある、マルコーニのメディア技術に関する貢献の説明として正しいものを次のうちより選びなさい。

a．マルコーニは、ヘルツの実験を元に無線電信を実用化した。
b．マルコーニは、大西洋で遭難したタイタニック号に乗船していた。
c．マルコーニは、無線電信における超短波帯の電波の有用性を発見した。
d．マルコーニは、モールス符号を用いたラジオ放送を実用化した。

6．　グーテンベルクが活版印刷を発明した15世紀中頃の、日本の状況に関する説明として正しいものを次のうちより選びなさい。

a．源頼朝が征夷大将軍に就任し、鎌倉幕府が開かれ武家社会が形成された。
b．足利尊氏が開いた室町幕府の脆弱性が顕在化し、後に応仁の乱を招いた。
c．徳川家康が開いた江戸幕府が、その支配を日本全土に広げつつあった。
d．長岡京から平安京への遷都後、白河天皇が上皇となり院政を開始した。

7．　マクルーハンは時空間の歪みの発見や電信の発明が「グーテンベルクの銀河系」を解体したとする。そのように論じた理由として、もっとも適切なものを次のうちより選びなさい。

a．遠隔地へ瞬時に情報を送ることができるようになったから。
b．本を読むよりもインターネットで情報を得ることが主流となったから。
c．画像コンテンツを備えたテレビ放送がラジオ放送に取って代わったから。
d．写真や映画等映像文化の発達により活字文化が急激に衰退したから。

8．　SF漫画に登場する未来の道具のなかで「時空間の歪み」よりもむしろ「直線的なニュートン力学」を前提としているものを次のうちより選びなさい。

a．通り抜けると選んだ場所に行くことができる道具
b．体に付けると飛ぶことができる道具
c．未来・現在・過去に行くことができる道具
d．中に入れたものの時間を進めることができる道具

9．　日本は、2028年秋までに中波を用いたAMラジオ放送をすべて超短波に移行することを決定している。資料を踏まえ、その移行後に起こる可能性がもっとも高いものを次のうちより選びなさい。

ａ．多様なリスナー層向けの番組制作がより進む。
ｂ．インターネット等を用いたメディアミックスがより進む。
ｃ．日本からのラジオ放送の遠距離受信がより困難となる。
ｄ．海外のラジオ放送からの混信がより深刻となる。

10.　今日の世界では、メディアへのアクセスをめぐる不均衡が社会問題となっている。「すべての人のメディア・アクセスを実現する取り組み」を2015年の国連サミットで採択された「SDGs（持続可能な開発目標）17の目標」に当てはめるにあたり、もっとも適当と考えられるものを次のうちより選びなさい。

ａ.「つくる責任　つかう責任」
ｂ.「海の豊かさを守ろう」
ｃ.「質の高い教育をみんなに」
ｄ.「気候変動に具体的な対応を」

11.　資料にある、「ラジオNIKKEI」に関する記述として正しいものを次のうちより選びなさい。

ａ．大気中を直進することが可能な極超短波帯の電波を使用している。
ｂ．米国ピッツバーグより輸入した大出力の送信機を用いて放送している。
ｃ．衛星による中継やケーブルを用いた有線回線を用いて放送している。
ｄ．電離層反射により長距離伝播が可能な電波帯を使用している。

12.　資料にある、「マルコーニの銀河系」の説明としてもっともふさわしいものを次のうちより選びなさい。

a．デジタルメディアとアナログメディアがバランス良く共存する世界。
b．印刷物に代わり電波メディアが私たちをつなぐ主要な媒体となった世界。
c．安価なスマートフォンの普及によりデジタル・ディバイドが解決された世界。
d．コミュニケーションにおける即時性がその意義を失う世界。

13.　資料にある、「電波戦争」の説明として、もっとも適切なものを次のうちより選びなさい。

a．東西陣営は電子機器の開発分野で激しい競争をしていた。
b．武力攻撃を有利に進めるために、両陣営とも電波網の獲得に余念がなかった。
c．東西の境界を越えて政治理念のプロパガンダを行う競争が展開された。
d．敵側の通信を遮断するために、メディアインフラを積極的に破壊した。

14.　モスクワ放送でソビエト連邦が対外宣伝を行うために用いた64言語に含まれなかったと考えられるものを次のうちより選びなさい。

a．ウクライナ語
b．トルコ語
c．日本語
d．ヒンディー語

15.　中波・短波を用いたラジオ放送の弱点として、資料に挙げられていないものを次のうちより選びなさい。

a．音声の再現性や音質の面では、他のメディアに劣る。
b．近接周波数の電波による混信を受ける場合がある。
c．毎日、同じ状態で放送が受信できるというわけではない。
d．受信にあたっては、高度な専門知識が必要となる。

16. プラグマティズム（pragmatism）は社会の仕組みを考えるにあたり、理念よりも行動の結果を重視する米国社会の合理主義的傾向を基礎付けた思想の一つであるが、その特徴の記述としてもっとも適当であると考えられるものを次のうちより選びなさい。

a．プラグマティズムは、知の探究において重要視されるべきは理論のみとする。
b．プラグマティズムにおける知の探究は、形而上学的な方法によってなされる。
c．プラグマティズムは、知の探究において重要視されるべきは歴史的必然性とする。
d．プラグマティズムにおける知の探究と実用性の追求は、必ずしも矛盾しない。

17. ジョージ・オーウェルの『1984 年』は架空の全体主義社会を描いている。全体主義には国民が一丸となることで社会的問題を解決するなどの側面もあるが、しばしば指摘されるのは負の側面である。全体主義社会が招く危険性として、本文の主張が示唆するものを次のうちより選びなさい。

a．指導者個人に権力が集中し、独裁制に陥り腐敗が蔓延する。
b．社会的少数者や弱者が迫害の対象となる。
c．お互いを監視し合い、反対意見を言う者は粛正される。
d．自国の優位性を示すために、他国を侵略する。

18. マクルーハンは「一台のコンピュータ」と不定冠詞 a を付して表現しているが、筆者がこのことに言及する意図としてもっとも適当であると考えられるものを次のうちより選びなさい。

a．アレクサンドリア図書館のように、地球村はすべての情報が一箇所に集約された便利な場所であることを賛美するため。
b．地球村は電子頭脳を備え、全世界に神経を張り巡らす一人の人間のような自律的存在であることに注意を促すため。
c．「部族的太鼓」に象徴される画一的な体制で世界を包み込む地球村には、全体主義的傾向があることに警鐘を鳴らすため。
d．キリスト教の唯一の勢力として頂点に立つ教皇が権力を掌握していたカトリック教会と、世界を一つにするような地球村が同一であることを強調するため。

19. ピエール・テイヤール・ド・シャルダンは北京原人の発掘にも関わった学者であるが、中国の北京と日本の東京を直線（最短距離）で結んだとき、その線上に一番近い都市を次のうちより選びなさい。

a．上海
b．ソウル
c．大阪
d．ウラジオストク

20. 資料にある、「騒がしい地球村」の描写としてもっともふさわしいと考えられるものを次のうちより選びなさい。

a．行き過ぎた個人主義崇拝がもたらす世界の最終形。
b．電子メディアがもたらすディストピアの最終形。
c．電子メディアによる共存が完璧に調和が取れている状態。
d．様々なメッセージがボーダーレスに飛び交う状態。

21. 資料にある、「私たちの共存は完璧に調和が取れている」の意味としてもっともふさわしいものを次のうちより選びなさい。

a．お互いの個性を尊重することで、うまくバランスが取られている。
b．みんなが同じことを感じたり行ったりすることを強制されている。
c．社会生活とプライベートを完全に分けることで、衝突を避けられている。
d．全員が基本的な考え方を共有することなく、社会秩序が保たれている。

22. アレクサンドリア図書館に所蔵されていた書物は主にパピルスで作られていた。英語のpaperの語源ともなったパピルスの原料を次のうちより選びなさい。

a．水草
b．木材
c．動物の皮
d．亜麻

23.　活版印刷術の発明によりもたらされた社会の変化のうち、本文の論旨に合致するものを次のうちより選びなさい。

a．知識人が情報を独占する時代が終わり、一般大衆も知識を得やすくなった。
b．本を出版するためにかかる時間が減り、費用も安くなった。
c．ドイツ語などの俗語が用いられるようになり、各国語の発展につながった。
d．出版物の数が増え、その内容も多様化し、娯楽本も出回るようになった。

24.　資料では、活版印刷の発明が、教皇を中心としたカトリック教会の絶対的権威の弱体化に拍車をかけたとされているが、それとは逆にカトリック教会の絶対的権威の強化に寄与したとみなすことができる歴史的事象を次のうちより選びなさい。

a．三十年戦争の結果、スペインがオランダの独立を承認し、神聖ローマ帝国がスイスの独立を認め、帝国内の領邦にも完全主権が認められた。
b．トマス・アクィナスは「哲学は神学の婢（はしため）」と考え、アリストテレス哲学を用いてキリスト教神学を解釈しようと試みた。
c．フランス革命が起こると、人間は生まれながらに平等であるとする人権宣言が採択され、圧政への抵抗権、思想・言論の自由などが保障された。
d．ルネサンスのエラスムスやトマス＝モアといった人文主義者たちは、ギリシア・ローマの古典古代の文化を研究することにより、人間性の復活を目指した。

25.　インターネット上のコミュニケーションの現状について、本資料の筆者の見解にもっとも近いと考えられるものを次のうちより選びなさい。

a．インターネット上のやりとりはビッグ・ブラザーにより仕切られている。
b．コミュニケーションのすべてがいずれはインターネット経由となる。
c．インターネットは個人主義崇拝のメディアとは言い切れない。
d．インターネット上の「いいね」は個人的意見の表明である。

26.　エコーチェンバー（共鳴室）現象とは、自分と興味の対象が近いユーザーばかりをフォローすると、似たような情報だけが耳に入ってくるようになる現象のことである。その説明として、資料の中心的な主張ではないものを次のうちより選びなさい。

a．多種多様な意見に触れる機会が減り、物事に対する客観的な判断ができなくなる。
b．反対意見や少数意見を拒絶したり、攻撃したりする言動が繰り返される。
c．自分と異なる意見を持つ者との意見交換のために、インターネットを利用する。
d．情報の正確性を見極めることが難しくなり、誤情報が無批判に拡散されやすい。

27.　削除

28.　資料にある、「つながっていない個々が電子メディアを駆使し、不安定ながらもつながっていく」社会におけるコミュニケーションの理解として、もっとも適当と考えられるものを次のうちより選びなさい。

a．電子メールの返信迅速性は、人間関係の密度の高さの指標となる。
b．電子メールの無返信は、人間関係の断絶を必ずしも意味しない。
c．ラジオやテレビといったマスメディアを中心とした社会は、人間関係が希薄である。
d．インターネットを中心とした社会は、人間関係が選択的かつ支配的である。

29.　コミュニケーションについて、資料にあるジョン・ダーラム・ピーターズの考えから類推することができるものを次のうちより選びなさい。

a．コミュニケーションには、共通言語が必須である。
b．コミュニケーションには、文化的同質性が必須である。
c．文化の相違は、コミュニケーションを阻害する要因ではない。
d．物理的距離があればあるほど、コミュニケーションの密度は高くなる。

30.　資料にある、パイオニア 10 号・11 号の「当てのない宇宙の旅」のエピソードの説明として正しくないものを次のうちより選びなさい。

a．パイオニア 10 号・11 号の観測ミッションの目的は、太陽系外の知的生命体の存在を証明することであった。
b．パイオニア 10 号・11 号に搭載した金属板に描かれた図解は、地球の位置や人類の図解が描かれている。
c．パイオニア 10 号・11 号に搭載した金属板に描かれた図解を、地球外知的生命体が理解できるか否かは定かではない。
d．パイオニア 10 号・11 号のミッションに、太陽系外の知的生命体からのメッセージを地球に持ち帰ることは含まれていない。

31.　資料において、筆者が旧約聖書「伝道の書」からの引用を記した意図として、もっとも可能性が高いと考えられるものを次のうちより選びなさい。

a．私たちの不断の努力は、霊的な力の作用により必ず実を結ぶことを示すため。
b．私たちと地球外知的生命とのつながりは極めて霊的な体験であることを示すため。
c．希望や情熱は私たちのすべての営みにおいて唯一必要なものであることを示すため。
d．自分の望んだ結果が得られなくとも希望や情熱を失ってはならないことを示すため。

32.　ゲーテの作品は同時代に各国語に翻訳されヨーロッパ中で人気を博し、国や文化の違いを超えて価値あるものとして「世界文学」と称された。ゲーテの説明としてもっとも適切なものを次のうちより選びなさい。

a．民主的な社会を理想としてめざす歴史大河小説を書いた。
b．誰もが共感するような一人の人間の生き方を色鮮やかに描いた。
c．民話を題材に子どもの心に寄り添った童話を書いた。
d．王政復古期の欺瞞に満ちた社会を風刺的に描いた。

33.　資料全体の論旨を踏まえ、資料の筆者の意見にもっとも近いと考えられるものを次のうちより選びなさい。

a．人類は進歩的な動物であり、故に何事においても完璧を求めるのが世の常である。
b．人類は支配欲旺盛な動物であり、その欲が私たちの行動の主な動機となっている。
c．コミュニケーションの本質は双方向性であり、それは古代から現代に至るまで普遍であり、今後もそうあり続ける。
d．コミュニケーションは人間の想定をはるかに超え、その作用は私たちが思わぬところで思わぬ形となって現れるかもしれない。

34.　この資料にタイトルをつけるならば、もっともふさわしいと考えられるものを次のうちより選びなさい。

a．宇宙皮膜とマルコーニの銀河系
b．アレクサンドリア図書館としてのインターネット
c．メディア技術発展の限界
d．ルターとグーテンベルクの銀河系

35.　資料に基づくと、マクルーハンの学術に関する記述としてもっともふさわしいと考えられるものを次のうちより選びなさい。

a．マクルーハンはもっぱら社会科学者として研鑽を積んだ。
b．マクルーハンの学術は研究者以外の一般人には理解し難い。
c．マクルーハンの学術の評価は、北米と欧州とで二分している。
d．マクルーハンの研究対象は電子メディアに限らない。

36.　地球村を構成するメディアとしてSNS（ソーシャルネットワーキングサービス）を想定したとき、資料の内容にもっとも合致しているものを次のうちより選びなさい。

a．SNSはボーダーレスな電子メディアであり、国境を越えて誰でも受信可能なものである。
b．SNSが作るのは様々な声がひしめきあう「騒がしい地球村」であり、ユーザー個人の持つ多様性が保障されている。
c．SNSは一見個人主義に適したメディアのように思われるが、他者の意見をすり込まれる可能性が常に存在する場である。
d．SNSは遠く離れた個々人を通信によって接続し、ユーザー間のギャップを埋めるという重要な役割を果たす。

37.　マクルーハンの地球村はインターネットの予見であるか否かを巡る議論に対する、本資料の筆者の立場にもっとも近いと考えられるものを次のうちより選びなさい。

a．多くの識者が指摘するように、マクルーハンの地球村はまさにインターネットを予見したものと考えざるを得ない。
b．現在のデジタルメディアの技術発展を考えると、マクルーハンの地球村とインターネットとは全く別物であると考えるべきであろう。
c．マクルーハンの地球村は、現代のメディア社会を考えるための有益な視点を提示する。それがインターネットの予見であるか否かは、二次的な問題である。
d．マクルーハンの地球村を巡る市井の人たちの議論は非建設的である。地球村の概念をやみくもに用いて現代のメディア社会を論じるべきではない。

38.　18 世紀欧州の近代的な郵便通信の黎明期、手紙の交換は「主としてニュースの輸送手段」であり、「他人の手紙を借り出したり、書き写したりすることがあっただけではなく、少なからぬ手紙は（中略）始めから印刷を予定していた。だから、当時、よく出来た手紙には「印刷に廻せるほど立派な」という、流行の言い廻しがあった」（ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換　市民社会の一カテゴリーについての探究（第 2 版）』細谷貞雄・山田正行訳、1994 年）。ここから読み取れる、当時のメディア・コミュニケーション状況の理解としてもっとも妥当と考えられるものを次のうちより選びなさい。

a．当時、メディア・コミュニケーションによるプライバシーの侵害は既に大きな社会問題となっていた。
b．当時、ニュース報道等のメディア・コミュニケーションはすべて公権力の検閲を受けていた。
c．当時、手紙をメディアとして用いた私的なメッセージのやり取りは原則禁止されていた。
d．当時、メディア・コミュニケーションにおいて公的なものと私的なものとの境は曖昧であった。

39.　ラジオやテレビの普及は公用語や標準語を広める一方で、少数言語や方言を衰退させることとなった。例えば日本ではアイヌ語を消滅の危機がある言語として保存、継承する取り組みがなされている。言語や方言が衰退、消滅することで起こる問題として、資料の筆者がもっとも重要視すると考えられるものを次のうちより選びなさい。

a．その言語や方言で残された歴史的資料を解読することができなくなり、昔の出来事が後世に伝わらなくなる。
b．言語学の研究対象である言語が失われることで、体系的な研究に空白部分ができてしまうため、研究結果が正しくなくなる。
c．高齢者と若者とで使う言語が異なるため、世代間コミュニケーションが困難になり、世代間対立が起こる。
d．文化の基盤である言語が失われることで、文化そのものが失われ均一で多様性の乏しい世界になる。

40.　電子メディアの普及は黙読を中心とする活字文化から聴覚・視覚等の身体感覚を重視する声の文化への回帰を一部実現したと言うことができる。その根拠としてもっとも適当であると考えられるものを次のうちより選びなさい。

a．活版印刷術による書物の大量生産は識字率を上昇させたが、テレビなどの映像メディアの普及により識字率が若干ではあるが低下したから。

b．活版印刷術により文字伝達が口頭伝達に取って代わったが、音声動画メディアの普及により話し言葉による伝達が再び活発となったから。

c．活版印刷術により知識の個人所有が進み黙読が主流となったが、デジタルメディア技術の発達によって自動音読が一般化したから。

d．活版印刷術は知識や情報を書籍というかたちで商品化したが、インターネットなどで届けられる情報は無償の声として消費されるようになったから。

（このページは空白です。）

（このページは空白です。）

（このページは空白です。）